

4月3日 復活節第2主日

わたしの主、わたしの神

ヨハネによる福音書 20章 19～31節

¹⁹ その日、すなわち週の初めの日の夕方、弟子たちはユダヤ人を恐れて、自分たちのいる家の戸に鍵をかけていた。そこへ、イエスが来て真ん中に立ち、「あなたがたに平和があるように」と言われた。²⁰ そう言って、手とわき腹とをお見せになった。弟子たちは、主を見て喜んだ。²¹ イエスは重ねて言われた。「あなたがたに平和があるように。父がわたしをお遣わしになったように、わたしもあなたがたを遣わす。」²² そう言ってから、彼らに息を吹きかけて言われた。「聖霊を受けなさい。²³ だれの罪でも、あなたがたが赦せば、その罪は赦される。だれの罪でも、あなたがたが赦さなければ、赦されないまま残る。」

²⁴ 十二人の一人でディディモと呼ばれるトマスは、イエスが来られたとき、彼らと一緒にいなかった。²⁵ そこで、ほかの弟子たちが、「わたしたちは主を見た」と言うと、トマスは言った。「あの方の手に釘の跡を見、この指を釘跡に入れてみなければ、また、この手をそのわき腹に入れてみなければ、わたしは決して信じない。」²⁶ さて八日の後、弟子たちはまた家の中におり、トマスも一緒にいた。戸にはみな鍵がかけてあったのに、イエスが来て真ん中に立ち、「あなたがたに平和があるように」と言われた。²⁷ それから、トマスに言われた。「あなたの指をここに当てて、わたしの手を見なさい。また、あなたの手を伸ばし、わたしのわき腹に入れなさい。信じない者ではなく、信じる者になりなさい。」²⁸ トマスは答えて、「わたしの主、わたしの神よ」と言った。²⁹ イエスはトマスに言われた。「わたしを見たから信じたのか。見ないのに信じる人は、幸いです。」

³⁰ このほかにも、イエスは弟子たちの前で、多くのしるしをなさしたが、それはこの書物に書かれていない。³¹ これらのことが書かれたのは、あなたがたが、イエスは神の子メシアであると信じるためであり、また、信じてイエスの名により命を受けるためである。

他の朗読：使徒言行録 5:12～16 詩編 118:2～4, 22～27 黙示録 1:9～13, 17～19

Lectio…読む

再びヨハネは、復活したキリストとの貴重な出会いを分かち合うために、閉じられた扉の裏側に私たちを連れて行ってくれます。イエスの死後紀元30年頃、エルサレムに住んでいたキリスト者の間に、多くの同じような話が出回りました。福音書記者たちは、これらの話を教えのために用いたのです。

今日私たちは弟子たちの日曜日の集まりの見物人です。突然イエスが現れ、弟子たちは大喜びします。イエスは福音を広めるために彼らを遣わし、罪を赦す権限を彼らに与え、聖霊を受け取るようにと彼らに息を吹きかけます。

不運なことに、十二使徒の一人であるトマスはこの体験を共有できませんでした。他の者たちが、自分たちは生きた主イエスに会った、とトマスに伝えたとき、彼はそれを信じませんでした。むしろ彼はイエスの手にある釘の跡に指を入れ、わき腹の傷に触れてみるまで信じないと宣言したのです。

弟子たちは次の日曜に再び集まり、今度はトマスも彼らと一緒にいました。主が現れ、彼らに挨拶をします。驚くことにイエスは、彼の傷を指で確かめ、わき腹に手を入れるようにトマスに命じるのです。

イエスの存在はもはや否定する余地がなく、トマスは圧倒されて、イエスは彼の主であり彼の神であると言います。

トマスは復活したキリストを見たので、信仰告白をしました。イエスは、後世の、肉体的にイエスを見ることなくイエスを信じている人すべてに目を向けています。

Meditatio…黙想する

復活のイエスを見たときに弟子たちが感じたに違いない喜びと興奮を想像してみましょう。

復活のイエスを見て、トマスの信仰は燃え上がりました。あなたは、イエスをあなたの生ける主として受け入れているでしょうか。それとも受け入れる前に更なる証がほしいと思っているでしょうか。イエスは弟子たちに「あなたがたに平和があるように」と言いました。これらの心強い言葉の意味深さについて、よく考えてみましょう。

Oratio…祈る

「わたしの主、わたしの神よ」。これはトマスの信仰宣言でした。これはシンプルでありながら、深遠な祈りです。これを自分自身のものにし、この週を通して祈ることができるでしょうか。自分自身の信仰告白をし、イエスを信頼するときに、あなたに語りかける神に心を開きましょう。

Contemplatio…観想する

イエスの復活を祝い続けましょう。詩編 118 編からの節をよく考えてみましょう。

「慈しみはとこしえに」(4 節)

「家を建てる者の退けた石が／隅の親石となった。

これは主の御業／わたしたちの目には驚くべきこと。

今日こそ主の御業の日。

今日を喜び祝い、喜び踊ろう。」(22～24 節)